

風

韻

第 6 号

故 柚木前学長追悼号 (1965年度)

神 戸 大 学 風 韻 会



「松風」 宇治正夫師範
 (昭和40年12月12日 於 大槻能楽堂)

風韻 第6号 目次

五十年の体験……………師範 宇治正夫 …… 1

— 故 柚木馨先生を悼む —

柚木先生を憶う……………	宇治正夫 ……	3
故 柚木馨先生と謡曲……………	藤井 茂 ……	4
柚木先生の思い出……………	荒川 祐吉 ……	8

— 先輩登場 —

〔その1〕先輩消息欄……………	旧 2 石崎治郎 ……	10
	旧 3 泉谷忠一 ……	10
	旧 5 米花 稔 ……	11
	旧 14 小杉岩蔵 ……	11
	旧 21 小林利外 ……	11
新 2 毛受幸郎 ……		11
〔その2〕リレー随筆 謡に憶う……………	旧 4 南 盛雄	12
	〔その3〕関西凌霜謡同好会キャリア調べ……………	13

走馬燈…………… 17

五十嵐勝三、岸本公男、大林治郎、楠田美樹
 小寺満雄、永江幹雄、山本康之、岸本悦郎
 長谷川晴美、福本久美子、砂見章子

▶ 昭和四十年年度風韻会活動総括

風韻会のあしあと……………	30
学連コンクールを終えて……………	五十嵐勝三 …… 34
神戸大学風韻会名簿……………	35
編集後記……………	50

表紙題字は宇治師範筆



神戸大学風韻会秋季発表会
(昭和40年11月29日 於 講堂)



13回生歓送謡会
(昭和40年3月22日 於 学生集会所)

五十年の体験

(その二)

師範 宇治正夫

何事を学ぶにも、習う人の些細な言動によって、著しく教える者の気持を変えるものである。例えば、これは出稽古の最も甚だしい例であるが、初めは今日こそ十分に教えてあげたいと思って居ても、五分十分、ひどい時には二〜三十分も待たせた上で、漸く見台の前に座ったと思うと、徐ろに本をあげて、「今日は此処でしたか」などと質問を発し、「デハ」と先生が諷いかけて教行謡った時に、「イヤこれは前に済んだ処です」などと言って、またアチコチと辿り乍ら、「どうもこの辺らしい」と言うので、また諷いかけると、「イヤ此処も前に済んだ処です」などとやられると、全く厭になってしまふ。

また、一家で四〜五人稽古される家で、一人が済んで次の人との間五〜六分、長い時は十分以上も待たされる家がある。その家の人は、あまり続けさまに押掛けては先生がエライだろうという思いやり(?)かも知れないが、教える者の気持としては、つめかけて前の人が引いたらすぐ次の人と代って座ってもらわないと、気の抜けるもの

である。次を急ぐ時などは、途中で止めて帰ろうかと思うことも度々である。

また、稽古場でも、見台の前へ座ってから必ず雑談を始める人がある。良い加減に合槌を打っていると、何時までも止めないで、終には孫の自慢話まで出て来る始末で、後に待って居る人に気の毒でどうにもやり切れない気持ちになる。

また、こんな人もある。ある処で直すと、「イヤほんとに先生のおっしゃる通りです。何々先生はどう誦われたが、あれは面白くない。家元はどうの、前の家元はどうであった」とか言って、しまいにはどちらが先生か判らぬ様な状態に陥る。こんなのは皆、その人は何とも思っていないのであろうけれども、教える者の気持をそらすというか、ハグらかすというか、教える意欲をそがれることは甚だしいものである。

また、この頃の人は自分の稽古だけで、人の稽古を聞きたがらない様に思われるが、自分の稽古の時は判らなくても、人の稽古を聞くと良く判るものであるから、よし判らなくても如何にも感に打たれた様な顔をして聞いていると、何時となくあたりの空気がとけ込んで、予想外の効果を挙げるものである。

要するに、先生の言動をよく聴いたり見たりして、なるべく感心する。感心出来ぬ時でも一応感心してみるのが、習い上手というものである。

(つづく)

故 柚木馨先生を悼む

柚木先生は昭和四十年十一月十九日、私達の御回復への祈りも空しく逝去されました。先生は学長としての御多忙な毎日にも、風韻会の顧問として会の発展に対する御尽力は多大のものがありません。入学式やガイダンス等の際にも「今年の新入会員は何名くらいですか」とか「学舎統合により、風韻会も一年生から四年生まで一緒に活動でき、将来が楽しみです」とか、おっしゃっておられたところからも、先生の会に対する並々ならぬ御配慮の程が伺われます。私達は本号を柚木先生追悼号として先生の霊前に捧げたく、宇治正夫師範、藤井茂先生、荒川祐吉先生に、ありし日の柚木先生を語っていただき、先生の御冥福を御祈り申し上げる次第であります。

柚木先生を憶う

宇 治 正 夫

誦い出し堂々として余韻に鈴のような響きを持って何とも言えぬ

好ましい誦、それは柚木先生の誦であった。御稽古初めに、私が伺ったのは篠原四丁目の御宅で、酒樽やビール箱の山積してあるのに驚いたものである。その頃、学内随一の名講義との評判も聞いて居た。

その後何かの都合で熊内橋通五丁目の私の宅へ故花戸先生を始め先生方八人ばかり揃って御稽古に見えた時代がある。その稽古時間中の厳粛さは到底他の稽古場では見られない尊いもので私も随分身を入れて稽古したものである。また後で四方山の話に花が咲いているという教えられた事も多く私の一生を通して最も充実した時間を持ち得たことを感謝して居る次第である。

又一面先生は、非常に豪放な物にこだわらぬ気持の良い方であった。時々前述の様に話はずんで思わず遅くなり急いで帰られた跡に必らず幾つかのお忘れ物があつて煙草のケース・眼鏡入などから時には羽織や外套のような大きなものもあつてそれが大抵柚木先生のものであつた事を覚えて居る。

何かの事情で満洲建國大学へ行かれる事になり、その送別会に柚木のシテをお誦いになり、私の主義（社中のワキは誦わない方針）を破つてそのワキを誦つたのも再び帰って頂き度い念願からであった。その夢は叶えられて再び六甲台にその御声咳に接する事の出来る様になつて喜こんだのは昨日のような気がするのに……如何なる権力も及ばぬ無常の風に何と嘆いても返らぬ事と思ひ乍らまたしても悲しさがこみ上げてくる。……

故 柚木馨先生と謡曲

藤 井 茂

昭和四十年十一月十九日、柚木先生が逝去された。御病氣篤しと聞いてひたすらに御平癒を祈っていたのに、その効もなく御他界になり、痛恨措く能わぬものがある。

神戸大学風韻会では、十一月二十日に秋季発表会を予定しており、今回は特に学生の番囃子、舞囃子を加え、また鞍馬会時代の先輩方の参加という画期的な番組を組んでいたが、学長であり風韻会の顧問であられた柚木先生の御逝去に遭い、弔意を表して発表会を中止し、十一月二十九日に追悼の謡会に切り替えて先生を偲びながら、御霊前に真心をこめた謡を捧げた次第である。先生も学生達の真摯な謡や舞を御受納下さったこととひそかに心を慰めている。

思えば、一年前の十一月四日、宝生会と風韻会が合同で第一回神戸大学能楽大会を催したとき、先生はそれに「あいさつ」の一文を寄せられ、「……私も大乗気で、一つ「安宅」でもやらしてもらって、勧進帳でも声高らかに読み上げたいものだ」と楽しみにしていたのだが、最近ちょっと体をこわして、出演不能になったことは返すかえすも残念なことである。……わが国固有の芸術は難解なので、教養のないものにはちよつと近より難いのであるけれども、せめて大学生諸君にはじつくりと民族芸術をかみしめてもらいたいもので

ある。……」とのべておられる。多年、風韻会の顧問として学生とともに謡い、学生にはげましを与えられた柚木先生の学生謡曲に対する御期待が窺われる。それとともに、今この先生を失って先生の偉大さを知り、先生を偲ぶ追慕の情一入なるものがある。

わたくしは、先生が若くして留学御帰朝後教壇に立たれた最初の講義を聴いた学生の一人である。爾来三十有余年、公私共に御世話になった。こうした師弟、同僚の關係に加えて、わたくしは謡の道において三十余年先生とともにけいこをし、ともに謡う光榮をお勧めしたのが御縁で、先生御夫妻が謡をお初めになったのは昭和十年頃ではなかったかと思う。それ以来先生は御夫人とともに宇治正夫師範の高弟として熱心に斯道に精進され、心から謡をたのしみ愛していられた。

柚木先生の謡は先生の御人柄をそのままにあらわしていた。豪放で些末に拘泥せず、大らかでのびのびしたものであった。理屈や解釈を超越して曲中の人物になり切って謡われる先生の謡には柚木先生の人間そのものが打ち込まれていたと思われる。年とともに円熟を加えられ、独得の風格を増しておられたのに、もうあの少し前屈みに力一杯に謡われる先生の御姿やお声に接することができないと思うと淋しさがひしひしと迫ってくる。

わたくしは一日、筐底から古い謡の番組をとり出して柚木先生の出演された番組を選り出してみた。昭和十年から最近にいたるまで、宇治風韻会、神戸大学風韻会、神戸大学教官の会など先生が出

演された一つ一つの会の様子が思い起されて、先生の思い出にひたつた。中には先生御夫妻がシテ、ワキを共にされたものがあり、またわたくしがお相手させて頂いたものも少くない。神戸大学の教官と組まれたものが数多いのはいうまでもない。先生の出演曲目が鉢木や山姥のように豪快なものに多いのも、先生の謡の特徴もあらわしていて興味深いものがある。

以下、主な番組についてその日時、場所、曲目、配役などを記して、柚木先生と謡を共にした方々とともに、先生の謡と人とを偲ぶよすがとしたい。

三

わたくしの手持ちの番組の中で、柚木先生の名があらわれるのは昭和十一年に始まる。

(以下敬称略、最初に出る場合のほかは姓のみを示す)

◇昭和十一年

- 五月二四日 風韻会 神戸神港倶楽部
- 小袖曾我 (十郎) 柚木(五郎) 加藤一郎(母) 丹波康太郎
- 六月一四日 教官謡会(加藤一郎氏渡独送別謡会)
- 芦屋 自得庵
- 富士太鼓 シテ柚木 ワキ花戸竜蔵 ツレ金田近二
- 十一月一日 風韻会 国柱会館
- 天 鼓 シテ柚木 ワキ丹波

なお、この会に柚木夫人も芦刈のツレに出ておられる。この年の正月と推定される神戸大学教官の謡初め会の番組があり、柚木先生は田村のワキと狸々のシテに出ておられる。出し物からみて、これ

が柚木先生が会に出られた最初のものではないかと思う。柚木夫人のお話によれば巻絹が最初の出し物であった由。この頃から神戸大学教官の間に謡が大いに流行し、番組には柚木先生をはじめ故花戸竜蔵先生、故白杉三郎教授など今はなつかしいお名前や古林喜楽、佐野一彦、金田近二、川上太郎、加藤一郎、生島遼一、八木弘、丹波康太郎の諸氏、それにわたくしなど当時の若手助教、助手の名がずらりと並んでいる。

◇昭和十二年

- 二月一日 神大風韻会旧制第六回卒業記念 国柱会館
- 芦 刈 シテ柚木 ワキ生島遼一 ツレ中島信行
- 三月二日 教官謡会(加藤、古林両氏歓迎会)
- 御影 中勝寺
- 羽 衣 シテ柚木 ワキ八木弘
- 天 鼓 シテ古林喜楽 ワキ柚木
- 十一月四日 風韻会 国柱会館
- 安達原 シテ柚木 ワキ天竜弘藏 ワキツレ謙山勝保
- 十二月五日 神大風韻会(旧制第七回生送別) 大学講堂
- 善 界 シテ青木順造 ワキ丹波 ツレ柚木

◇昭和十三年

- 二月六日 神大風韻会(旧制第七回卒業記念) 国柱会館
- 藤 戸 シテ藤井 ワキ柚木 ワキツレ丹波
- 三月二七日 風韻会 国柱会館
- 熊 野 シテ柚木 ワキ藤井 ツレ佐野一彦
- 四月二五日 風韻会(二十周年記念大会) 光徳寺会館

- 安達原 シテ清水利信 ワキ柚木 ワキツレ長田八重雄
五月二二日 風韻会(物故社中追善) 楠寺
鶴 銅 シテ柚木 ワキ川上太郎 ワキツレ櫻原昌夫
◇昭和十五年

三月九日 教官議會(柚木先生送別) 聖徳院
小袖曾我 シテ柚木 (五郎) 八木 (母) 川上
この会は柚木先生の満洲の大学の御転任を惜別するためのもので、柚木先生は右のほかには鉢木のシテを、これに対して宇治師範が特例をもってワキを勤められた。当日の番組は竹生島、八島、草子洗小町、富士太鼓、鉢木、小袖曾我、天鼓で白杉、藤井、金田、川上、丹波、古林、佐野、八木、生島、加藤、柚木、柚木夫人、生島夫人、俵夫人(順不同)の諸氏の名が列ねてある。

戦後、柚木先生の御帰国によって再び先生の話を聴くことができようになった。

◇昭和二十一年

- 十一月 神大風韻会 大学講堂
安達原 シテ柚木 ワキ丹波 ワキツレ米花稔

◇昭和二十六年

- 四月二日 風韻会 大槻能楽堂
草子洗小町 シテ柚木 ワキ笹谷茂 ツレ多田恒夫
二月九日 風韻会 湊川能楽殿
山 姥 シテ柚木 ワキ藤井 ツレ前田英二
◇昭和二十七年

- 六月一日 風韻会 大槻能楽堂
神 歌 翁柚木 千歳田村勇
高 砂 シテ柚木 ワキ里井順次郎 ツレ川上
九月四日 神大風韻会 大学講堂
安宅勸進帳 シテ柚木 ワキ前田一二 同山略
◇昭和二十八年

- 二月四日 風韻会 看護会館
藤 戸 シテ藤井 ワキ柚木 ツレ浜田千鶴子
三月八日 神大風韻会(卒業送別) 大学講堂
鉢 木 シテ古林 ワキ柚木 ツレ米花
八月二日 風韻会 大槻能楽堂
通小町 シテ前田一二 ワキ柚木 ツレ松田幸次郎
九月三日 神大風韻会 大学講堂
女郎花 シテ柚木 ワキ八木 ツレ里井三千夫
一〇月二日 風韻会 湊川能楽舞台
通 盛 シテ柚木 ワキ藤井 ツレ大角征夫

◇昭和二十九年

- 二月一九日 風韻会 吉岡舞台
高 砂 シテ柚木 ワキ藤井 ツレ大角
六月二七日 風韻会 湊川能楽殿
弱法師 シテ柚木 ワキ浜田諒造
一〇月三二日 神大風韻会 大学講堂
通小町 シテ柚木 ワキ藤井 ツレ柚木夫人
◇昭和三十年
二月二七日 神大風韻会 大学学生集会所

◇昭和三十三年

- 五月五日 風韻会 大槻能楽堂
弱法師 シテ里井三千雄 ワキ柚木
◇昭和三十三年

- 三月二日 神大風韻会(第一二回卒業送別) 学生集会所
藤 戸 シテ柚木 ワキ古林
六月二日 風韻会(舞台竣工記念) 風韻楽堂
山 姥 シテ柚木 ワキ、ツレ略
◇昭和四十年

- 一月三二日 風韻会 風韻楽堂
景 清 シテ柚木 ワキ国重 ツレ荒川
三月二二日 神大風韻会(第一三回卒業送別) 学生集会所
鉢 木 シテ柚木 ワキ藤井 ツレ荒川

このほかに神戸大学教官の宝生と観世の二流の有志で二声会という会をもっており、柚木先生もこの両三年参加しておられた。四十年の正月の例会で柚木先生が鉢木のシテ(福光教授のワキ、柚木夫人のツレ)を謡われ、柚木夫人が小鼓で高砂の一調(藤井が地を謡わして頂いた)を打たれた。謡のすんだ後で小宴を開き正月気分とともに同好の親しみを深めたことである。先生と一日を心のどかに共にした最後の機会であった。

番組の一つ一つに当時の追憶がこもり、時の経つのも忘れるほどである。

謹んで柚木先生の御霊の安らかならんことを祈念しつつ。

(昭和四十年十二月十六日夜)

- 鉢 木 シテ川上 ワキ柚木 ツレ米花
五月二日 神大風韻会 大学講堂
千 手 シテ米花 ワキ柚木 ツレ川上
六月二日 風韻会 湊川能楽殿
藤 戸 シテ藤井 ワキ柚木
一月二七日 神大風韻会(藤井渡欧送別) 学生集会所
鉢 木 シテ藤井 ワキ柚木 ツレ米花
このときから一年三カ月間、わたくしの留学中、神大風韻会の面倒を柚木先生にお願いした。なおこの会には向井利昌、則武保夫、山瀬善一の諸教授が初めて出演された。
◇昭和三十六年
八月二六日 風韻会(物故社中追善) 松泉館
遊行柳 シテ柚木 ワキ荒川祐吉
◇昭和三十七年
三月一八日 風韻会(創立四五周年記念) 大槻能楽堂
正尊(起請文)シテ柚木 ワキ藤井 ツレ国重猛 静鎌田真弓 ツレ伊藤欣二

(大曲の抜きをされたわけで、お隣りに座っていて先生の呼吸や脈搏が感ぜられるほどのこもった一曲であった。)

- 三月二二日 神大風韻会(第十回卒業送別) 学生集会所
藤 戸 シテ柚木 ワキ福光家慶
一月二五日 風韻会(創立四五周年記念) 湊川能舞台
恋重荷 シテ柚木夫人 ワキ柚木 ツレ田中照子
大曲を御夫妻で謡われた記念すべき番組である。

柚木先生の思い出

荒川祐吉

暖い陽ざしの昼下り、今はもう卓球部の部屋になった、そしてその西端に風韻会が陣どっている講堂横の建物の一室、そこはまた敗戦の傷手から立ち直らない我が国の経済を、そして学習一途に生きてこられた大学教授達の生活の苦勞を象徴するかの如く、教官宿舍になっていたその一室、柚木先生宅のお部屋で私は始めて宇治先生から鶴亀を教わったのです。それから毎週一回から二回研究の合間をぬってこの部屋へ通い、だんだんと話の面白さをも悟っていったことでした。その間、直接先生にはお目にかかる機会は数多くはありませんでしたが、お茶菓子などをよべながら奥様と又、時には先生と些かの談話の時期を持つことが出来たことなど、思い出すと今も昨日のように偲ばれ、先生御夫妻の恩顔がまぶたから離れません。

それから一年あまり、不幸にして私自身病床に伏すことになりましたとき、思いがけなく先生の奥様から、手づからお作り下さったチョコレート入りボンボンをお届け下さいまして感涙にむせんだ事でした。病氣は一年で回復後、再びお稽古をはじめることが出来るようになり数年が過ぎました。しばらくは先生とお目にかかる機会を得ぬままに過ぎましたが、何時でしたか西宮北口での甲東園行バス待合所で偶然先生御夫妻にお目にかかりました。先生はにこやかに

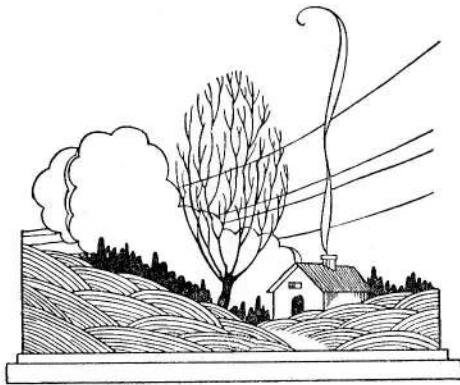
微笑まれ、「荒川君、相変らずやっていますか」とお尋ね下さいました。お話を伺がうと丁度先生は奥様が鼓をお習いになっておられて、時々合わせて一緒にお楽しみにになっておられるとかで本当にお元氣にかつ幸福そうに見え、大変羨ましく感じたものです。

話の関係で先生に最後にお目にかかったのは昨年夏、神大在勤の鶴世・宝生流両流の同好教官で結成している二声会の集まりに於てでした。丁度、私は日本生産性本部の経営アカデミーのスタッフとして夏期合宿に参加し帰宅したばかりでしたが、風邪をひいて声が変になりましたが、その時既に先生には和服にお着替えになっておられました。「参加不可能なる事実証なりというわけだな」と、おわりになり去ってしまったとは未だに信じられないような気がします。殊にこれは話とは関係ありませんが、福田敬太郎先生記念事業会で十月初めに行ないました肖像写真贈呈式には先生は誠にお元氣な姿で御列席下され、話で鍛えられた臍々たるお声で福田先生の御健康ぶりと御精神をたたえる挨拶をされました。そのお声は未だに私の耳にこびりついて消えません。

先生は学長になられたときから既に御自身の御健康をお考えになり、或は御心に何等か期するところがあられたのか、機会あることに御講演の記録を印刷にされ、われわれ大学人に配布して下さいました。今となつてはこれらは先生が学長として、そのお命を賭けて我々に進路を示された御遺言となつてしまつたわけです。

公私共に柚木先生に特別の御縁を得た私としては、先生の御

逝去は余りにも大きなショックです。未だにどこかで先生が御元氣でおられるのではないかと、という錯覚にとらわれることもしばしばです。けれど「先生既になし」ということは認めざるを得ぬ事実です。実に人の世は朝の紅顔、夕には白骨となる無常の風にさらされていますが、唯、今は心から先生の御冥福をお祈りするばかりです。そして時には謡曲にあるように夢になりとも現世とのつながりをもたれ、私共を公私にわたり尚はげまし導いて下さることをも念じるものであります。



先輩登場

前号に引き続き、消息欄、リレー隨筆を設け、今回から新たに大先輩である関西凌霜謡曲同好会の諸先輩にも御登場して頂くことにしました。

その① 消息欄

今回は次の七先輩の御協力をいただきました。回答を御願ひ致しました項目は次の通りです。

- 一、家族構成
- 二、最近思うこと。
- 三、後輩に一言
- 四、先輩間通信

四、学生当時岡本氏、甲斐氏、生田氏等多士済々、有力メンバーが誘って下さったのは運がよかつたのでしよう。今でも時々当時の学生会館を思い出しますが、すっかり焼けた事でしょう。

昭和九年卒業（旧制三回生）

泉 谷 忠 一

昭和八年卒業（旧制二回生）

石 崎 治 郎

一、妻 清子

長男 一夫（南海電鉄厚生課勤務）

二女 佳江（大阪府民信用組合勤務）

長女 恭子 は酒井泉と結婚し、家より離れて居ります。

二、永く勤めた関西電力を停年で退き関係会社の関電興業に籍をおいています。人生についてゆつくり考えたいと思ひ乍らバタバタと時間を過ごす毎日です。

三、若い時代に身につけたことは生涯にわたって光りを加えます。色々な方面で励んで下さる様に。

一、息子三人はどうやら学校も終り夫々他都市で就職
 四人目長女は高校二年生、妻と共に家におります。
 二、謡の方は仲間がありますが、恥づかし乍らあまり出席出来ず従って一向に上達していませんが、仲人を引受けた時位はその場を相勤めます。そんな折には学生時代に多少乍らも謡の手ほどきを受けた事を有難く思います。

昭和十一年卒業（旧制五回生）

米 花 稔

います。

昭和二十六年卒業（旧制二十一回生）

小 林 利 外

一、夫婦、二女、一男、元気に過しております。
 二、大先輩と意欲的な若い人々との間にあって、その年令にふさわしい研究者のあり方はいかがあるべきかということがつねに念頭にあります。
 三、風韻会学生諸君が熱心に活動せられているのについて、心から敬意を表します。
 四、謡曲に時間をさくことを全く怠っていますが、学内のもよおしで年数回召集せられることを有難く思います。

昭和十九年卒業（旧制十四回生）

小 杉 岩 蔵

一、妻、女子二人、母と五人暮し。
 二、謡曲で言う「位」のとり方、人徳というか人各々身ぶり話し方に人柄が現われるものですが、本人の気構え次第でその場に応じた適切な態度なり、話し方ができる筈で人生すべてを通じて、そういう表現の仕方、巧拙が効果を左右することでしょう。役柄、その場のムード、序破急の段階ごとにデリケートに位のとり方を教える、謡曲や仕舞に学ぶべき点は多いと思います。

昭和二十九年卒業（新制二回生）

毛 受 幸 郎

三、技巧に感わされず、肚から声を出す訓練を積むことを特に切望します。

四、凌霜謡会と称する大先輩の会合があるようですが、我々とは年令が離れ過ぎるので、若い層で楽しめる様な催しをもちたいと思

一、母 みぎは
 妻 伸子
 長男 一郎
 次男 靖弘
 長女 伸子
 三男 淳男
 二、時代が平和の為特に人間関係が大切です。お互いに信頼するよう自分を修養したいものです。
 三、むづかしい事ですが将来に自分の希望をもつことです。
 四、恥しいこと乍らお互いに通信もしていない現状、若い人達の努力によりて助けてもらい度い。宝塚の小生の家でも使ってもらって会でもやって下さい。小生の出来ることなら思っていますから連絡下さい。

一、妻

長男

二、物言えは唇さむし秋の風

三、人間の能力に大差なし、体をきたえておけ。

四、御無沙汰申し訳ありません。

謡に憶う

昭和十年卒(旧・四)

南 盛 雄

七月頃と思う。岡本さん(旧・三)から「風韻」誌のリレー随筆に是非何か書いてもらいたいと依頼があった。そして間もなく投稿指令のハガキが風韻会幹事氏から来た。折角おそわった謡曲も最近時は折角にふれて謡うだけとなって、殊に風韻会には御無沙汰ばかりなのでペンをとるのも気がひける思いだが指令のハガキを眺め机の前に座れば妙に学生時代の風韻会での事ども思い浮び、月並の思い出話だがペンを走らせることにした。

前号の風韻誌で岡本さんが言っておられるように、昭和七年私が大学に入った年の会の名前はまだ鞍馬会であった。然し師範は既に宇治先生であったから前師範には私達は接したことはなかった。そして翌年の昭和八年に会名が風韻会に改められて今日に到っている。入学と同時にクラブ活動には謡曲部を選んで入部したが、当時

は二回生に国重、生田、高崎(現姓大本)、丹波の諸氏、三回生には岡本、萩野、大野、泉谷、長野、それに今はなき井村、松永の錚々たる先輩諸氏がおられ風韻会初期の黄金時代だったでしょう。従って新入生の私達は実によく鍛われたものである。一回生の藤井さん(現会長)は既に卒業しておられたが会には何時も出て後輩を黙々のうちに激励しておられた。また田岡さんの仕舞「船开慶」が今だに印象的に浮んでくる。このように先輩諸氏がその実力の程もよく揃い、すぐれていたため私達四回生の者が一年二年と稽古を積んで力劣りが感じられてならなかった。

ともかく、在学三年間で鍛えられ習得した謡の力を基礎として社会に出てからも勤務先関係で北浜謡曲会のレギュラー・メンバーとして約七年間謡曲に親しんで来た。この間最初の三年間は風韻会からの案内があれば参会したのだが、それも戦争の深刻さを増して行くにつれとだえ勝ちとなり、私自身も一年足らずだったが海軍に応召、そして昭和二十年の終戦を迎えた。昭和二十四年勤務先の証券取引所が再開されてぼつぼつ謡曲会が開かれるようになって、昭和二十六年頃だったか宇治先生に再び師事することになって稽古場を天満京阪前に作った。然し、ここでの稽古が二年程続いた頃、取引所の労組が結成されてスト続きの状態となってからは御無沙汰勝ちとなり北浜謡曲会に参会する回数も減って来て、ここ二、三年はとんと出席していない。それで今では聞かしていただくのは楽しみだが、会に出るのはおつ、く、であり、またその自信もない。私の

ようなコースをたどる方も多かろうと思うが、我ながら残念である。

このような仕儀で最近では同好の謡曲会に出ることも杜絶えてはいるが、休日のゆつたりした日には我流になって仕舞った私の「謡」を語ったりすることがあるが結構楽しいものである。丁度三年前になるか、昭和三十六年に大学を出て社会人になっている私の長男が時折謡う私の謡に魅力(自信過剰)を感じたのか習いたいという。これはしめた。私の心の負担を転嫁する絶好の機会なりと早速宇治先生をお願いして大阪梅田の先生の稽古場へ通わせることとした。親子二代続いて先生におそわることなどうれしいことだと思っていたが、一年程思うように稽古が出来ないらしい、学生時代のようにはうまく行かないものだつくづく感じさせられる。

最後に最近のうれしかったことを申し述べる。さる十月二日(土曜日)に御師福田敬太郎先生御退官記念事業会の主催で記念事業の一部として先生の肖像写真の贈呈式が大学本館貴賓室で行われ、その後夕方から記念宴会が三宮パウリスタで開かれその宴会に出席した際、藤井、岡本の両先輩にお目にかかった。全く久しぶりであったのでうれしかった。席上藤井さんが福田先生の為に高砂のキリを颯々として謡いおさめられたがそれが実に立派だった。学者としての藤井先生については私が申し上げるまでもないことだが、趣味としても終始謡曲に徹しておられる姿には感服の外はない。節に徹することに通じ仲々出来ないことである。

次のパトンは〇〇氏にお願いしたい。(交渉中)

その③

関西凌霜謡曲

同好会キャリア調べ

我々の大先輩がどのような動機で謡を始められたかなど、なかなか興味深い資料を掲載させていただきました。(敬称略)

(1)謡(鼓・太鼓)を始められた時。(2)始められた動機は。(3)最初の師匠名(流名)。(4)現在の師匠名(流名)。(5)能を舞われまして(曲名・年月日・舞台名)。(6)謡曲・仕舞・囃子・能に関する御感想。

○高井勘太郎(高商一回)(1)古いことです。(2)別れない。(3)小林憲太郎師、梅田邦久師(片山一門)(4)全上(5)十三番位。最近「鉢木」(ワキ和田伝三郎氏)(6)何れも難しく一向に進歩しない。ただ、趣味として私に最適、また健康にも良い。

○田中載吉(高商三回)(1)明治42年(2)友人の勧めによる。(3)小川秀太郎師(広島)(4)永木基之師(広島)(5)大正十年秋「敦盛」のワキ。(6)謡曲の稽古は私の一生にとり非常に幸福をもたらした。老境に入り同好者と毎月1〜2回謡うことが、唯一の楽しみです。

○田伏修(高商八回)(1)神戸在学時(2)父兄姉等に趣味があった。

(3)手塚亮太郎氏門下林田可久師(4)なし(5)なし(6)いずれまたの機会に。

○伊藤則忠(高商十一回)(1)(2)(3)明治45年、伯父三木百太郎氏に習う。大正4年在学中に観世流青颯会を創設し、植田師匠を学生会館に招き稽古を始め。(4)昭和20年戦後師匠なし(以前は観世流橋岡派中道先生に師事)(5)昭和4〜5年袴能「清経」「盛久」(大阪くらぶ)

○吉川治一郎(高商十一回)(1)大正8〜9年頃(2)会社友人のすすめ。(3)宝生流一カ年(4)観世流竹吉文一師(5)なし。

○泉藤甚五郎(高商十一回)(1)不明(2)動機という程のものはない。(3)梅若春雄師(大正10年)(4)2〜3年前まで武田小兵衛師(5)なし(6)良いものだ。

○和田伝太郎(高商十二回)(1)大正9年、ワキ昭和25年(2)友人のすすめ。(3)ワキ高安流植見源三郎師(4)観世流小林憲太郎師、ワキ福王茂十郎師(5)ワキ出演「鉢木」「蟬丸」「弱法師」「船弁慶」「熊野」「藤戸」「小鍛冶」「鉄輪」「羽衣」等十五番。大阪・大槻・山本舞台、大阪能楽協会、和歌山E.T.C(6)奥深くやればやる程難かしいものと思われる。

○青木又雄(高商十二回)(1)謡大正4年秋、仕舞昭和15〜17年(2)在学中の下宿小島先生宅で無理に教えられ、卒業後大正8年面白くなり五十年間の病みつき。(3)小島甚三郎師、囃喉権九郎師(梅若)(4)最近十年間師匠なし。最後は大槻門島末次郎師(5)なし(6)謡曲のみ

都井上派)(5)否(6)我々素人には謡曲といえは役の事を問題にしがりますが、地謡殊に地頭とのハーモニーについて練習の要ありと思えます。

○小林善信(高商十八回)(1)大正9年(2)貧乏書生でもやれると思っ

た。(3)観世流伊勢普宣師(4)なし(5)否(6)なし。
○若林与左衛門(高商十八回)(1)謡5才、小鼓24才、太鼓35才、(2)父祖代々の趣味、囃子では小鼓の伝統あり。(3)5才で父、10才で観世流小島甚三郎師、18〜22才父(福王流)22〜27才先代中村弥三郎師、先代逝去後囃子に転向、太鼓35才頃、葛野流斎田喜兵衛師、小鼓24才幸流斎田師、30才より先代曾和脩吉師(5)大鼓、小鼓とも毎年2〜3回能に出演

○若林秀雄(高商十八回)(1)昭和24年5月(2)洋楽より和楽へ転向(3)森田流野口伝吉師(4)全上(5)能の笛を勤めたこと約10回あり。(6)謡曲、仕舞をやられる方も、囃子を稽古なされる事により一段と興味を増すのではないだろうか。

○前田英一(高商十九回)(1)謡大正14年、鼓昭和27年(2)謡は会社の先輩にすすめられ、鼓は自発的(3)謡平井宗一郎(梅若)鼓大村良二師(大倉流)(4)謡なし、鼓大村師(5)なし(6)下手の横好きで、名人の能を觀賞するのが最も楽しみです。

○内海実(高商二十一回)(1)幼少時(2)父が好きで教えてくれた。(3)父(観世流)(4)大西信久師(5)否(6)幽玄に魅せられます。

○平井光治(高商二十一回)(1)なし(2)会社友人にすすめる。(3)猪

に徹して自らの楽しみとし、能も成可く見て謡曲の深奥を知りたい。

○栗岡治作(高商十五回)(1)一九一九年(2)神戸同級生謡曲部発足(3)喜多、野添勝己師(4)梅若六郎師(一九二七年〜一九六五年)(5)「俊寛」(昭32大槻)、「三井寺」(昭34)、「山姥」(昭36)、「景清」(昭39東京)、「砧」(昭40大槻予定)(6)謡い、舞う、実に楽しい。まだまだ人口に立った感じ。初心のつもりで、これらが本当の稽古らしい稽古をしたいと張切っている。前途無限が嬉しい。

○酒井利貞(高商十五回)(1)謡大正11年、仕舞昭和23年(2)父が好きで幼年の頃から耳にしていた。(3)佐野光太郎師(4)佐野氏令息善之師(5)未だ演じたことなし。(6)持病の胃病がなくなり、健康で独りでも楽しめるので喜んでいる。

○田中六郎(高商十五回)(1)二十才頃父よう習う。(2)父のすすめによる。(3)里井順次郎師(4)吉村直之師、島米次郎師のO・Bとして大会に出演する。(5)なし(6)各曲目を通じ静と動の巧妙な組合わせや、その調和の面白さに心を惹かれる。

○由良良史(高商十五回)(1)昭和25年(2)社内謡曲大会ができたので(3)林鶴川師(3)京都井上嘉久師門下岡村先生(5)なし(6)健康の為続けたし。

○石井源一(高商十六回)(1)大正7年予科一年(4)木内善師

○井口宗敏(高商十六回)(1)大正10年(2)友人若林利造君(凌霜)のすすめによる。(3)若林利造君(京都井上嘉輔師)(4)勝部全一師(京

俣勇準職分(4)梅若六郎家元、猪俣職分(5)仕舞、舞囃子のみ。(6)仕舞・舞囃子を今後も続けたいと思っています。

○木村清一(高商二十二回)(1)昭和3年(2)井口先輩(16回)の勧誘による。(3)観世流植田青颯師(4)武長師(5)なし(6)見たり聞いたりすることは洵に愉しいのですが、稽古の閑がないのが残念です。

○藤尾豊一(高商二十二回)(1)謡大正13年11月、仕舞昭和4〜10年まで(大連)和泉流狂言昭和9〜10年(大連)土田他吉郎師(2)従弟藤幸夫(20回)に突然引張り出された。(3)木下一二師、次で鞍馬会伊勢普宣師に共に学ぶ、昭和3年卒業後渡支(満洲華北)、終戦まで在中國勤務。事変の都度稽古を中止、平穩な日々には同好の士と専ら会を持った。(4)下川勝一師に入門しているが、稽古が殆んど出来ず残念です。(5)能狂言「口真似」「墨塗女」の二番習得したので大連・奉天・北京で演じたことがある。(6)若年の時の熱心さでやれたら少しは巧くなっていたが、中国で稽古中止、転任、最後の引揚げでは本を遺留したりで再発足中です。

○香川義行(高商二十二回)(1)昭和23年頃(2)何か趣味を求めて(3)観世流日下部且三氏(外科医)(4)観世流窪野高師(5)なし(6)謡曲・仕舞いつまでやっても上手になれませぬ。

○谷本繁(高商二十三回)(1)謡昭和21年、仕舞昭和35年(2)好きだから(3)潮昭寺師(4)藤井久雄師(5)否(6)これ程面白いものはない。

○岡崎久雄(高商二十四回)(1)昭和2年(2)鞍馬会に入会、安直且健全な趣味(3)伊勢普宣師(4)なし(5)なし(6)卒業後も職場でやっていたが

中絶、井口先輩の世話で復活中、テレビ等観賞できて伝統文化と人生の味が感ぜられる事あり。

○豊島又衛(高商二十五回)(1)謡昭和3年(2)唯何となく始めた、戦後は手近なりクレーション。(3)藤井友治郎師(4)なし(藤井師昭和30年逝去)(5)なし(6)謡曲人口を殖やす為、教授法を変えねばならぬ、素謡五十番の処で間拍子を教えることも一方法と思う。

○大森三郎(高商二十五回)(1)昭和37年(2)職場サークルで(3)上田新太郎師(4)大槻文蔵師(5)なし(6)独りで楽しめるものである、馳だし者を指導される機関が欲しい。

○藤井茂(学一)(1)昭和5年(神商大一年)(2)寄宿舎先輩同窓の勧めによる。(3)伊勢普宣師(4)昭和7年以降宇治正夫師(5)否(6)謡曲を精神修養と心得て継続中

○生田八郎(学二)(1)昭和2年4月神戸高商在学中(2)亡父のすすめによる。(3)伊勢普宣師(4)なし(5)なし(6)老後の楽しみにしている。

○国重猛(学二)(1)昭和8年4月(2)神戸高商謡曲部入会(3)伊勢普宣師(4)宇治正夫師(5)なし(6)なし

○林一馬(学二)(1)昭和39年7月(2)友人にすすめられて(3)宇治正夫師(4)全上(5)まだです(6)大変修養になります。

○米花稔(学五)(1)昭和8年大学入学と共に(2)幼少より父の謡曲を聞き関心があり。(3)宇治正夫師(5)なし。

○福光家慶(学九)(1)昭和8年秋(2)クレーションの為(3)水津幸祐

氏(観世ノンプロ)(4)浜田繁師(観世鉄山系)(5)なし(6)特になし。
○荒川祐吉(学十六)(1)昭和29年(2)神大藤井教授のすすめによる。(3)宇治正夫師(2)全上(5)なし。
○山家猛(新制経済二)(1)昭和27年(大学三年)(3)宇治正夫師(4)井上嘉久師門下光田佳弘師(5)なし(6)当流の発展は同慶の至りです。テレビ、ラジオの演出少なきを残念に思う。



走

馬

燈

六甲台に学んではや四年、今年も十二名の会員が社会に巣立って行きます。彼らの胸中にはどんな思い出が渦巻いているのでしょうか。

謡で得たこと

(B・14) 五十嵐勝三

私の風韻会生活は大きく分けて次の二つのに分けられます。その一つは一年―三年の間と、他の一つは四年の時期です。

私の一年―三年の間は、風韻会にはいった限り続けねばならないと思い、かつ自分でどれだけ一つのこと打ちこめるかを試してみようと気持ちによって支えられていた時期ですから、ただ声を出し、仕舞の足どりを覚えたりした時代です。この時期には謡というものの味、あるいは謡に対する認識は皆無でした。三年の後半から四年の初めにかけて、幹事長という重荷から解放されると同時に最高学年という責任感から更に一層の練習をすることによって次のことを自分なりに体験できたことは今後の生活に大いにプラスになると確信を持てるようになった。

(一)謡・仕舞の究極の目標は「精神統一」の手段であること。そのために姿勢をよくし、腹式呼吸をして、下腹に力を入れて発声する

ように努力しなければならない。ここでは節の上げ下げはそれへの達する一手段であり、最終目標たりえないこと。

(二)仕舞を通じて、細心の注意が必要であること。目の位置が少しくるうことによってその仕舞が生きてこないことも認識でき、仕舞をやることによって一層謡というものを理解しえたこと。

(三)謡における役を通じて、他人をたてることによって、より以上に自分を主張することが可能となることを認識できたこと。

(四)謡曲、仕舞を通じて人格形成が可能なることを認識できたこと。謡が進歩しない場合には、自己の生活も満足なものではありえない。その生活態度を改めなければならぬ。謡を進歩させるにはその生活態度を改めなければならぬ。そこに自分に打ち勝つだけの努力が必要となり、その努力の結果、謡が進歩し、自分の生活態度も改善されるというように、それらが循環するのであり、謡は自分の生活態度の鏡であり、自己反省の手段でもあり得る。

次にサークルに於る人間関係を通じての人間形成というものは前述のことで明らかである。ではサークルにはいる必要がないと疑問を持たれる人があるかもしれないが、次のことによって解答が与え

られる。即ち、前述したように自覚した会員同志では、自ら謡を通じて互いに理解し、自己の反省の機会を与えると同時に相手にもそれを与えることが可能となる。ただそのように謡というものを理解せず、単に人間関係云々といつても我々自身が未完成であり、又自分を隠すことが多い集団の中では、はたして真実の人間関係というものはないか。それは偽りであり、仲良グループであつて、「お話し相手」に終つてしまふのではないだろうか。

これから今後の風韻会を考へるとき、少し心残りがするのであるが、とりこし苦勞でありたいものです。

(四)上手に謡つたり、あのように謡おうと思つた時に必ずまちがえたり、終曲後は気分がぱつとしません。ここにとらわれないで謡うことの必要を認めざるを得ない。

このようにある程度、謡というものを意識できるようになつてから、謡うことが楽しく何の義務感というものもなくなりました。これも一途に宇治先生の御指導の賜物と感謝しております。また先生には公私を問わず御指導をいただきましたことをあわせて御礼申し上げます。

藤井先生、都留先生にも私事にわたり御指導を賜り心から御礼申し上げます。

また御指導下さつた先輩諸氏、同輩ならびに御協力下さつた後輩諸君に心からお礼申し上げます。

最後に、風韻会の御発展を心からお祈り申し上げます。

わぬと、三年一同が一体となつて物議をかもした事である。この事件結局最後まで尾を引いていた様で、歓送会の席上で先生方が帰られてから又々大論争と相成つた。いい思い出である。又前田先輩にズバリと「君達は下手だ」と言われて頭に來たり情ない思いもした。これも結局いい葉になつてその後、我々もメキメキと上達した様である。こんな事もあつて、後輩諸君には口喧しく言う方が良いと合点して、うるさがられる程あれこれと言つた訳である。

四年間を振り返り、中でも一番勉強になつたのは、宇治先生に直接指導を仰いだことである。本命の謡曲の方は小生の努力不足でウマくはならなかつたが、練習後色々とお話を伺えた事は本当に有益であつた。「謡は修業である」コンクールに臨む日「審査員には聞かせてやるんだという意気を持ちなさい」又、沢庵禅師の健康法と謡曲の練習との共通点のお話など、どれをとつても忘れられないものばかりである。さすが達人の言葉であると深く感じ入っている。

又々、振り返つてみて反省を始めると、キリがないが一番反省している事は、永らく「謡曲の練習だけでは物足りない」と腹の底で思つていた事である。これはとんだ大間違いだつた。コンクールの練習に打込んでみてわかつたのであるが、実に難しい。打ち込めば打ち込むほど厚い壁が現われ、途方にくれる事が度々であつた。後輩諸君の中にかつての小生の様な考えを持っている人がいたら、今一度態度を改めて熱心に取組んでみなさいと言いたいです。自分がトクをします。

又、再入部を申し出た某君、そのつけて出した条件があまり勝手すぎるとはねつけてしまつたが、思えば悪い事をしてしまつた。時

ある風韻男児の感謝の記

岸 本 公 男

ふとした動機からこの世界に首を突込んで以來、四年が過ぎ去ろうとしている。謡十年と言われるが、その半分にも手が届こうとしているから早いものである。その間、謡曲なんぞは非生産的だと言つては右を向き、こんな進歩のない世界は御免だと言つては左を向き、ムズかつていた小生がともかくもここ迄來られたのは、偏に先生はじめ諸先輩並に同輩後輩諸君のおかげであると、深く感謝しております。本当に有難うございました。

ほんとに早いものである。姫路でのジュニア時代にはデモも授業もない練習だと言つて生協の二階でウナツていた処、さる教授にヤンワリとではあるが叱られてしまつた。こんな事を言つてはマズいのだが、傑作だつた。又、一方では謡曲だけでは物足らずと、若いエネルギーを柔道で発散していた時もあった。思えば笑止ではあるが。しかし結局二足の鞋は履き兼ねて、風韻会の一員になり切つたのは六甲台に上つてからの事である。

六甲台での生活は多忙で本当に豊かなものだつた。ゼミで稲葉教授にギューギュー絞られ、悲鳴の代りだと言つては謡い、気持がムシヤクシヤする時には憤懣をブツつける様にして、悪声を張り上げと言つた風に練習には励んだものである。練習後のジャンにも精を出したのは言う迄もない。思い出深いのは四年生のやり方が気に喰

が時だけにといい苦しい弁解もあるが、結局のところ小生の狭量さ故で、全く申し訳ないと思つている。

次に恩恵を挙げるとこれ又枚挙に遑がない。正しく練習すれば腹式呼吸にもなり、立派な健康法になつていくし、目を外に転ずれば凌霜会の大先輩方ともしばしではあるが接する事ができるのも、大きな恩恵であるし……という風に。

本当に楽しい生活であつた。春には串カツ屋を出して資金を稼ぎ、夏には遙々信州路まで出かけて合宿したり、秋にはコンクールの練習でハッスルし、冬にはコタツに入つてあれやこれやと議論したりで、一年は素早く過ぎてゆく。その間、四年の秋の発表会には舞囃子「忠度」をやらせて戴いたのは有難い事であつた。

小生、四年間を通じて能楽論なるものには余り興味がなく、結局花伝書を一冊読んだだけに終つてしまつたが、これからは暇をみつめて、能楽に言うなれば知的に接近して解剖してみるのも面白からうと思つている。

最後に視点をもつと高く引上げれば、我々が謡曲の稽古であつたれとやれるのも、偏に世の中が平和だからこそである。我々の世代には戦争の体験はない。それは母の胸に抱かれてスヤスヤ眠つていくうちに終つてしまつた。実戦の体験などはないのである。映画とか書物とかで同様の経験はするが、実戦とはあんな生易しいものではないかと思う。それを思う時、余り安閑としても居れない気がする。かと言つてデモろう、赤旗をふるうというのではない。そういう大局的な動きには目を外らさずにやつて行こうと言っているのである。

結局まとまりのない文章になりましたが、要するに風韻会での生活は本当に楽しいものでした。皆さん色々と本当に有難うございました。この風韻男児、心から感謝しております。月並みな言葉ながら風韻会の発展を祈りつつペンを置きます。

風韻会と私

(B・14) 大村 治郎

入部の動機と申せば私の忍耐力と協調性がどれ程のものであるかを確かめたからでした。というのは私の性格として、お山の大将でありますので、団体生活についてゆけるか試みずつもりでした。極論すれば、特に風韻会でなくともそれは可能であったわけです。この事が謡に対して消極的態度となり、友人友人といひまして先輩から批判された原因であつたらうと思われまします。当時の私はそれが自覚できず、ただ先輩は差別待遇をしているように思われ、面白くなくて一種のひがみ多き奴であつたと思われまします、今私が四年生として後輩をみてみますと、矢張り謡に熱心である人に好感を持つ事になり、初めて先輩の気持ちが理解されました。

私は、前年度のコンクールでは大部ゴネまして先輩を困らせましたが、結果として私自身の謡に対する態度つまり謡の面白さ、クラブ活動への前向きな姿勢がとる事ができ大きなプラスとなりました。そこで、まだ謡に興味を抱けない方には幹事はできるだけ役に

つける事を提議します。下手な奴には端役でよいというのではなく、その人の訓練という意味で大役をつけていただきたいと思われまします。ただしその役に当つた人は確実に練習をし、研究してもらいたいと思ひます。私の考えには大勢の方から反論されると思われまします。しかし大義名分にとらわれず、下手な人の身になって考えていただきたく思ひます。クラブの向上か個人の向上か一度皆さんで討議して下さい。

さて前述しました忍耐力と協調性は四年間でどうなつたと申しますと、まあ文句のいいいながら同輩や後輩のおかげで続ける事ができました。今では謡についても、友人についても、又クラブの運営についても恵まれていて思ひます。私は下宿がずっと学校に近かつたので、多くの人に遊びに来ていただき嬉しい思いをしました。謡についてとか文学や週刊誌の話題で夜遅くまでベチャベチャと過しました。特に私は欠点の多い人間と見え、事実そのなかでしようが、多くの人からよく悪口をいわれ直して行く事ばかりと自覚して思ひます。ただ残念な事は先輩との私的つき合がなかつた事です。そこで、私は先輩とはこんなもんだらうと自己流で先輩振りを演出し、後輩の諸氏に迷惑をかけましたが当人はいい気持ちでした。どうもイバラセテいただきありがとうございました。

思い出の一つ、私共が二年の十二月に三上の三疊の下宿でスキ焼を食い酒のみ歌を歌って大騒ぎした事が嬉しく思われまします。十人では誰もゆつくりと寝る事もできず、ひざをまげたままで夜の白むのをまち一番電車に乗る為にでかけたら、歳末警戒中のお巡りさんに尋問された奴もいたりした事も、いい思い出となっています。

風韻会は、次の飛躍の方向をさがし求めていると思われまします。その基盤となる為には、前幹事長の五十嵐は私共の中で唯一一人心から苦しんだと思ひます。何にもできずに終つてしまつて彼には申し訳ないと思ひます。どうもいろいろありがとう。

最後に姫路分校時代の都留先生、そして謡の真の良さをお教え下さつた宇治先生に心からお礼の言葉を申し上げて、この拙文を終える事にします。

風韻会回顧録

(E・14) 楠田 美樹

大学生生活早くも四年、実に早く過ぎ去つてしまつたこの四年間をふり返つてみると色々な事があつた様に思われるが、その反面頭に浮ぶものといへば風韻会の事ばかりである。これ程風韻会生活の我が大学生生活に占める割合は大きかつたのではなからうか。

思えば古ぼけた姫路分校生協の二階へ小寺(E14)永江(E14)両君と共に上つて行くところから私の風韻会生活の幕が開いたのである。

最初私は風韻会とは詩吟のクラブだと思ひ込んでおり(これはクラブの宣伝不足か私の認識不足かは知らないが)両君に「風韻会へ入部しよう」と誘われた時即座に承知してしまつた。なぜなら当時バンカラに憧れていた私にとって詩吟は非常に男性的に思えたから

である。ところが謡曲部だと知り正直のところ少しガツカリしたが、大学時代は何でもやっておくべきじゃないか。謡曲は年寄りじみている(真剣にこう考えていた)がやってみてもよからう」と考え入部を決意した。この時より風韻会は一人の秀才(?)を手に入れたわけである。入部当時は唯都留先生の謡われるのを真似て一生懸命声をはり上げていたに過ぎなかつたが、それでも先生が「うまい、うまい。高校時代に謡曲をやつておられたの?」とおつしやつた時はお世辞とも知らずに「まんざら俺も捨てたものじゃないぞ」とひそかにほくそえんだものだった。姫路分校での一年間は瞬く間に過ぎてしまつた。しかしこの一年間で我等十四回生は少くとも意気投合した様に思えたのだが……。

六甲学舎に上つて来て初めて自分の謡が全く駄目なのに気づいた。勿論諸先輩方が上手過ぎたのかも知れないが……。ともあれ謡曲に対する自信がくずれ去つたのである。それに姫路分校時代からのクラブに対するいい加減な態度が付加して幹事学年たるにもかかわらず、クラブに非協力的になつていた。これが当時の幹事長五十嵐(B14)を窮地に追いやる因となつたとは夢想だになつたのだから今から思えば情ない話である。

かかるクラブに対する非協力的な態度を改める機となつたのは何といつてもコンクールに出場させてもらつた事であり、自分は風韻会の一員である事にようやく自覚したのであつた。

十三回生の方が卒業される時に「風韻会を任せるのは心配だ」と言われた時は「今までの俺達なら駄目かも知れぬがこれからは大丈夫」と心に誓つたものであつた。

四年生になって特に印象に残るものといえば舞囃子に出場させてもらったこととコンクール練習であろう。舞囃子の方は不得手な仕舞に対する曲りなりの自信をつける事に役立った(本番の時はあがってしまい散々であったが)コンクール練習に至っては今までバラバラであった教育学部と三学部の十四回生が力を合せる事ができたという大成果を修めた。この意味からしてもコンクールの如き一目標を設定して練習にはげむ事は意義あることではなからうか。

ともあれ我が風韻会生活は夢の様に過ぎ去った。しかし風韻会は発展の一路をたどって来ている事は万人の認めるところであり今後の発展も疑わなところであるが、各人が「自分こそ風韻会の一員であり自分の積極的な態度がなければクラブは衰退する」事を自覚しなければ発展はあり得ないと思う。これこそ私の風韻会生活を通じて感じ取った事柄なのである。

最後に四年間御指導を賜った宇治先生、都留先生に深く感謝の意を表して拙文としたい。

雑題

(E・14) 小寺満雄

動機

私が風韻会に入部させて頂いたのは一年生の後期からです。同じ寮仲間K氏とN氏と一緒に、姫路の生協の二階へおらずと入部

ったことです。「巴」に「雪はむら消えに残りて云々」のところはこの甲グリがありますが、別にその個所がこの曲のヤマであるとは私には思われず、この変な節まわしが一体どんな役目をしているのだろうと興味深く思いました。又たとえば謡の文句です。「紅葉狩」に「林間に酒を温めて紅葉を焼くとかや」の文章がありますが、論理的に言えば紅葉を焼いて酒を温めるのであり、その逆ではありませぬ。この文句は中国の文句から取ったものと思いますが、こういった表現の仕方に妙に感心したりしました。

退屈

初めて能を観た時は正直言って非常に退屈しました。舞台では人間は少しも動いてくれない。地謡は何を言っているかわからない(はじめて観た能は私の全然知らない曲でした)それなのに大勢の人はあんなに熱心に食い入る様に見える。どこにそんなに皆の見える能のすばらしいものがあるのだろうか。私にはさっぱりわからない。確かソ連の何とか言う名前の文化使節団の人が日本で能を観て、死ぬほど退屈したと言ったのは本当だと思われました。

ところが能を何度も観ているうちに、又自分の習った曲の数も増え仕舞もわかりかけてきますと少しずつ能もおもしろく感じられるようになり、時には思わずハッと鳥肌がたつような感じに襲われることもあるようになってきました。その上、能の鼓や笛や太鼓の音を聞くと、何か落ち着いた気分になれるようになったのだから不思議なものです。

紅葉狩

私の習った曲の中で好きなものは紅葉狩です。紅葉狩では美女が

を申し込みに行った事を憶えています。ところで何故風韻会に入部したのか、以前に入部の動機を問うアンケートがありました。能、謡曲に興味をもっていただけからか? そうですね。私の祖父がやっているのを見て感心したことがあります。(もともと祖父が宝生流とは知りませんでした)同じ趣味をもつ友人が欲しかったからですか?それは確かに言えます。友人に誘われて?そうN氏によく誘われました。どの動機が一番よく働いたかは今でもわかりませんが、これらがごっちゃになって入部したのでしよう。でも考えてみますと入部の動機は何であれ、大切なのは入部してからの心構えのように思います。

不眠症

風韻会の合宿は楽しいものですが、一番困ったことは皆と一緒に十一時消灯に眠れないことでした。私は小さい時からそうでしたが、高校の受験勉強、大学の寮生活、そして六甲に来て朝と夜が極端に逆である癖をもつ友人のN氏と同じ下宿に住みついたことにより、夜少くとも十二時には絶対に眠ることができないという事に相成りました。合宿で一時二時、時にはそれ以上の時間まで皆のいびきの合唱を聞きながら、真暗の中で眠れず、あんなに退屈したことはありません。

よこみち

私は謡曲を練習するのに変な処に妙に興味が引かれました。変なところというのはたとえば、甲グリという節まわしがありますが、それが出てくるとそれを練習することよりも、甲グリというめったに出てこない妙に高い調子の節が何故その場面に出てくるのかとい

鬼に変わる。この点同じような安達原も好きな曲といえます。私には怪奇趣味と言いますか、そういうたものがあつて怪談やポロのようなムードが好きです。キーツの詩には丁度紅葉狩と同じような作品がありました。こんな変なムード・雰囲気であの曲がどうのこうのと言うのは、能をよく理解していないからだと言われそうですが、凡そ芸術は理解する、わかるものではなくて感じるものだと思

感謝

ペンを持つて考えましたけれど、思い出すのはこんなつまらぬことばかり。要するに私は練習を特にサボリもせず、そうかといって熱心に部屋に通うといったこともなく、もう一つ意気込み真剣さが足りなかつたせいでしょう。私の謡曲が少しでも進歩をみせないのもうなづかれます。最後になりましたが宇治先生、都留先生はじめゼミナールでも御世話になった藤井先生、先輩諸氏、私を引っっぱって下さつた同輩諸氏、そして何もしてあげることのできなかつた後輩諸君に感謝する次第です。

卒業するの記

(E・14) 永江幹雄

卒業するからなにか書けとのこと。思えば大学四年も目前で終る。大学生生活四年、そして風韻会での三年の生活、これらが自分の

一生にどんな意味を持つのかは、死ぬ前に解るかも知れない。ここではただ思いつくままに、思い出や感慨を書くことにする。

風韻会も一つの社会である。そこには苦しみもあつたし、またそれ以上に喜びもあつた。それにしても一体自分はこの社会で何をすることが出来たのかと思うと少々情けない。だが少しは得る所があつた、いや当然何かあつたのには違ひなからうが、今の所これと言つた所が浮かんでこない。一つだけ浮かんでくるのは人間の面白さである。それをこの社会で充分に味わうことが出来たことである。実際我が風韻会には面白い人物が多かつた。(もつとも今時こんな古風な事をやる奴が集まるのだから、当然かも知れないが)実際、人生において楽しみはたくさんあるが(もつともそれ以上に苦しみが多いかも知れぬが)人と人との付き合いで、その人の味を知るということも大きな喜びである。

なにかひた向きになって、エネルギーに人生に立向う厳しさをK1氏に学ぶ。(もつともK1氏はマーシャンに於いてもそうであるが)人生をうまく生きる為には、人と人との交際に於いてどんな考慮をしなければならぬか、またとことんまで人が良さそういでどこか一本しまっている、そんな面白い人物をO氏に見る。(ただしO氏のエ:映画好みはどうも感心出来ない)

また一本気で純情で負けず嫌だが、どこからもくずれる様子のない厳しさを持つK2氏。真面目人間でコツコツタイプ、きつと大器晩成に違ひないK3氏には気短で直行的な小生にとつて学ぶべきタイプの人であつた。(その証拠にあれ程チンばかりしていた彼も時が経つにつれて、序々に強くなつたではないか)またI1氏は謡曲一

辺倒の人であつたが故に、謡曲に対する自分のあいまいさを絶えず叱つてくれる恐い存在であつた。ただI1氏においては、小生などの濫発する冗談をなかなか理解してもらえなかつたのは残念である。またY氏はどこなくひょうきんなムードを持ちながら体内から湧き上る情熱を絶えず溢れさせ、小生の如く情熱まことに消えなむとする輩にはまた尊敬すべき友であつた。(ただし彼はマーシャンは弱い)そしてI2氏には善意の人間の典型を、またM氏にはその大担さをそれぞれ学ぶ。またいつも笑を忘れず人を楽しませ、それでいながら人生に対してどこまでもまじめに立ち向うH1嬢、どこことなくやさしさをもちつつも、同時に厳しさをもつとても深い人間を思わせる女性のタイプをS嬢に、女性で人ができたらまさしくこんな人であるというタイプをH2嬢に見る。その他先輩、後輩諸氏もまたそれぞれ興味のある人々であつたことは言うまでもない。こんなことばかり書いて、謡曲について何も書いていないというのが、そもそも自分の風韻会での在り方であつたかもしれない。たしかに謡曲自身の魅力もないことはなかつたが、卒業するまでこの風韻会にいつづけたのはそれだけではないような気がする。

彼みたいな部員もまたおつても良いかもしれない。だがやはり風韻会は謡曲のサークルであることは言うまでもない。

結局その所をどうやっていくかが問題である。彼自身その所をどうすべきかはつきり解っていない。ただい得ることは風韻会の今の方向は間違つていないという感じがする。後輩諸君、更にこの方向を慎重にかつ大担に進めてくれ給え。彼達が入部した頃のサークルとしての風韻会と現在のそれとは格段の差がある。たいした

発展ではないか。先輩諸氏にはいささかサロン化せりの批判もあるが、決して彼はそう思わない。謡曲においても、仕舞に於いても部員のサークル意識に於いても、そしてサークル全体に於いてもいまや脱皮の時なのだ。よい意味での新しい風韻会は今やその基礎を次第に固めつつある。そしてその基礎固めの微少なながらも一役を買つて出た、彼達四年生をいささか誇りに思うものである。こんなことを書き出しているうちに、またあれやこれやと色々な思い出が湧き出してきた。なつかしき姫路風韻会、六甲での狸々。数回の合宿。

ああ思い出は良し。
卒業してもまだ社会人とはならない予定でありますから、後一年や二年は風韻会の高き部室に昇つて、皆と一緒にうなるつもりでありますから、よろしく。

「風韻会と私」

教育学部・十四回生 山本康之

大学四年間ながい様で短かつた。また短い様でながかつた。結局、すんでしまえば短かつたと思うのであろうか。

この四年間、どうやら風韻会の一員として命を承らえたようだ。楽しい事ばかりだつた、と切り切るには少々うしろめたいものが残る。しかし意義ある四年間だつたと自信をもつて言える。

途中で挫折しそうなことも二度三度、けれどもやめずに今

まで来れた。私一人の力ではなかつた。多くの人の時にはきびしく、時には暖かいはげましがあつたればこそである。私はそこにこの四年間最大の意義をみ出す。

私の風韻生活は大きく二つの時期に分けられる。一つは姫路分校時代、もう一つはシニアにあがつてから今日に至るまで。

分校時代は風韻で明け風韻で暮れた。といつてもいづら風韻会に熱申した。授業をサボルよりも練習をサボルことのほうがむづかしかつた。これを他人にまでおしつけようとして、おおいにたたかれたこともあつた。また、あまり熱申するあまりに何でも独断で処理しようとして、これもギューという目にあわされた。そのときには、「こんなに一生けん命やつとるのに、なんでこんな抗議をうけるんやろ。」と真剣に考えた。今にしておもえば「若かつたんだなア。」と我ながらほほえましく思う。が当時の私にとつては深刻な問題だつた。こんな経験をするのもあまり元気がよすぎたから、すなわち謡曲がおもしろかつたからだ。謡おうと思えばいつでも謡えた。生協の二階がすぐそこにあつたから、(今の二年、一年の人にはわからないだろうが)とにかく分校時代はバラ色だつた。

一方、第二期のシニア時代はうつつかわつて風波が立つた。原因は私自身にあつた。分校時代のあの謡曲熱がいちどにきめてしまつた。そのため他のサークルに入つて、ほぼ一年間風韻会を中途半端に考へていた。続けていることは続けたが、半ば逃げ腰であつたことは否めない。この一年の間が私の風韻生活の第一の危機だつた。それでもみんな私に声をかけてくれた。

そんなこんなで現在にいたつては、初めにも言つたとおり途

中坐折しそにはなつたけれど、今まで続けていてよかつたと思うのである。

学連のコンクールに出場したことは、とりわけ意義深いものだと思う。順位こそ我々にとっては不本位なものだつたけれど、コンクールに向けての練習は、私が謡を続ける限り終生わすれることができない思い出となるだろう。

ひとつ言いたいこと。現在六甲本部と住吉支部は、うまくいっているので安心はしているが、「風韻会はひとつ」ということを十分噛みしめておいて欲しい。住吉支部の自主性をも生かしつつ、風韻全体としてガッチリまとまってほしいと思うのである。

最後に、風韻会をおして知り合った多くの人々、よき師、よき先輩、よき同輩、よき後輩諸君、全ての人に感謝したいと思う。

「二つの意義」

岩本悦郎

入学した時こう思った。何かやりたい、何かとは勉強でない勉強である。勉強でない勉強とは幅と深みのある人間性(?)の追求である。こう思うとやはりサークル活動が頭に浮ぶ、高校時代のあの殻に閉じ籠った小さな生活に比し自由にして放漫な大学生活に於いては手足を伸ばさずには居れない。

だが今まで生活を共にして来た風韻会に何故入つたのか本当のと

ころわからない。強いて言えば親父が少し謡曲をやっていたのと、その時に入っていた他のサークルが余り面白くなかつたこと、又クラブの雰囲気自分の性に合つたのが腰を落ちさせた要因であつた。

謡曲に対する気持は漠然としたものであつた。新入部員にとつてはそのサークルに骨を埋めるか否かは、最初はそのサークルの雰囲気左右されやすい。姫路分校では便利の良い直ぐ集まれる場所があつたこと、それ程多人数の集まりではなく、膝を交え力一杯声を出し、その後でべちゃべちゃと喋り出すことにより部員一人一人をすぐ知り得たことの雰囲気は自分を引き留めるに十分であつた。

顧みればこの風韻会で過したことは二つの意義があつた。第一には、日本の古典なる謡曲をかじつてみて僅かではあるがその味を知つたということである。自分が力一杯の声を出してまずまず謡えた時等、もはや入部当時の漠然としたものではなく、はっきりとした能楽に対する愛着と興味が起つた。能の鑑賞もした。舞台で自分も舞うた。まさに静の中の迫力、閑寂の中の何とも言えぬ美しさを持つ能楽は日本だからこそ生まれたという感がする。ある人に「若いのによく老人じみたことをしているな」と言われたことがある。その時「ではあなたはどれだけ謡曲に関して知つて居るのか」と思わず反発した。能楽を知ることもなく、謡つたこともなくして云々と言うことがどうして出来ようか。凡そ物事には自分の身でもつてみなくては味わえぬものがある。自分にはそれがあつた。能や自分のうなつて居る姿を思い出しては喜しくなることもあつた。第二にはいろいろな人の考えを知つたことであり、どんな河でも自分

自身で豊富になることはなく、沢山の支流を受け入れて先へ導いて行くことがそうならせるのである。精神の大きさもやはりその通りである、ということを学んだことである。人と接触しお互に自分の思つていることを話し、意見を交換することぐらい満足いく気持ちになることはあるまい。僕をそうせしめた風韻会ではあるが、それと

の生活に片寄り過ぎ他の人間と接したとき、すばらしく新鮮な気持ちになつたことがある。そんな時は風韻会だけに閉じ籠ることの物足りなさを感じ、風韻会に対して倦怠的な気分になつた。そして又、最も親しい間でさえどんなに感情意見が違い、分れているか、たとえ同じ意見でさえ人とはその頭の中における位置、強度が違い、誤解や敵意のある離反のきっかけがどんな多様な姿で現われてくるか、我々の結束たるものの地盤は不安なものであると思うと、人間は誰も孤立している……。だが才能、環境、性格でどうしようもないこの内的必然に気付き、そして人は朗らかに接しているときは、ある種の苦しさから解放される。又凡そ大学生活という安住の地に腰を据えておれば、人と話しても何か或る一線を越えられぬのではないか。だがこの風韻会において様々な人と接し得たこの経験は、一介の社会人になろうとする自分には心の拠所になるに違いないと思つている。

風韻会、それは僕の大学生活の半分を占めたと言つても過言でない。部員の中には謡曲に全身を打ちこんだ人もいた。それだけ一つのこと打込める人は幸福だと思つた。又尊く美しいとも思つた。が、自分は決して謡曲に強い熱意をもつてやつた者ではなかつた。そんなになれなかつた。自分には他にせねばならぬ事があるのに何

風韻会と私

(P・14) 長谷川晴美

故風韻会にこれ程時間を費やさねばならぬのかと時々思つた。がその気持はやはり自分の決断力と実行力の不足から生じる心の迷いであると思わざるを得ない。謡曲それに関しては自分は落伍者かも知れぬ、だが謡曲は好きである。好きである限りは続けたい。そう思つている。

四年間の風韻会生活も、あつという間に過ぎてしまいました。思えば四年前、何もわからないまま同じ高校の先輩に連れられて、部室へ行き「紅葉狩」を謡つたのはつい昨日のように思われます。その当時の風韻会は、今からでは想像もできない程ちがつたムードでした。右をみても左をみても黒い学生服ばかり、たつた一人の女子部員として部室の中で、どこをどう動いてよいのかわからず、ただ戸惑うばかりでした。その年の夏、姫路分校からの女子部員一人を加えて、吉野での合宿も今思えば良い経験であつたかもしれぬ。

四年間、サークル活動が続いているが故に心の底から悩み、苦しみ抜いた事は数多くとはいわぬまでも、いろいろありました。その度にそのような苦しみから拔出そう、逃避しようとして何度退部を真剣に考えたかわかりません。ある時は真暗の中を手きぐり、右も左もわからずに歩いた事もあり、またある時は足元の石に気付か

ずにつまずき、転び、ひざに一杯泥がついた事もありました。しかしそれらの苦しみを乗り越え、忍び、耐抜き、石を自らの手で取りのけ、泥を自分で払いのけられるようになり、後からやってくる明るい光を背中を感じた時は「ああ、よかった。」「サークル活動を続けて良かった」と心の底から思うのである。またそのような壁を乗り越えた時、初めてしっかりと信念の持てる自分に気付くのである。そして今度、これ以上の困難が自分に降りかかろうとも、それらを克服できるだけの自信の持てる強い自分というものをそこに発見できるのである。

四年間、謡曲とは底のない深い深いものである事を知り、そしてそれを通じての精神修養はもとより、大きくサークル活動を通じて御立派な宇治先生を始め、多くの先輩や同輩から時には後輩からさえも学ぶことの多かったこの活動を通じて、人間として数々の勉強をさせられた事は、私を大きく成長させてくれました。そしてこの四年間で得た尊いものを、これからの厳しい人生の中に一社会人として、また一教育者として生きる自分の血とし肉として生かして行きたい。そしてよりよき人間として、よりよき教師として、たゆまない勉強をしながら努力と誠実と愛を持って、厳しくも豊かに、貧しくとも美しく人生をまっとうしたいと強く心に念ずるのである。

卒業を目の前にして

(P. 14) 福本久美子

今から四年前、私は沢山の同期生と共に神戸大学に入学した。そ

ないことを良い事にして、あつかましいのも限りなしです。何もいわずに今日まで導びいて下さったみなさんに心から感謝いたします。

練習もやる気を出してやる時はいいのですが、スランプに入ってしまうとどう仕様もない。こんな時はいつも長谷川さんの元気づけの言葉によって、頑張らなくてはと思いついたのです。先生には申し訳ありませんが技術なんて全然お話にならないと自分でわかっています。でも今頃は「謡曲に打ち込むことによって心豊かな人間になれたらそれで充分ではないか」という友の言葉に真実を見い出しました。だから卒業しても出来れば細々とでも続けられたらと思っています。ただ今になって「こんなことならもっと一生懸命練習をしておけばよかった」という後悔の念ばかりが残ります。

最後に風韻会会員として何のお役にもたちませんでした事を心からお詫びします。

「四年の終わりに一言」

教育学部 十四回生 砂見章子

このあいだ姫路分校で黄色い声を張りあげていたのに、もう卒業の年になった。四年になってからは教育実習があったり、母校の高等学校に手つだいに行ったりで、風韻会とは疎遠になりがちだったのだが、とにかく四年間消極的ながらも風韻会の一部員として、そ

の時の感懐は今も忘れられない。苦しい受験時代を乗切ってしまうとそのあとは、長閑でさわやかな青い海原がひらけていた。夢は胸ふくらませ本当のわが世の春であった。ところがジュニアは姫路分校で高校のすぐ近く、三年間通いなれた道を同じ自転車で行けばならない。そして自分の回りをみればこれ又、同じ高校の出身者ばかり、こんな所を見れば大学に入らなくて何の変化もあつたものじゃない。高校の延長で授業には欠かさず出席し、昼になれば満員の生協への道を急ぐ、こんな毎日では十分に満足しきれなくなり、若いエネルギーをぶつける何かを求め、一年の六月頃バトミントン部に入った。(この頃の私が風韻会に入るなど夢にも思っていないかった)口に入らぬ豆なら数え切れない程作ったものだ。薄暗い体育館で練習した甲斐もなく市民大会出場ではいつも高校生に負けるという有様、でも体を常に動かすということに喜びを覚えてただ夢中で一年半を過ぎたものである。さてジュニアになって姫路から住吉まで通うようになって根っからの真面目さがついて来て、朝は暗い内から家を出て、晩は暗くなつてから家に帰るといふ状態が続いた。「姫路分校は近くて良かった」という愚知の出ることしきり。伝書バトのような生活に味気なさを感じた頃、山本さんを中心に教育学部で「謡曲」をやることになり、私もその中に加えてもらうことにした。何気なく入ったのが「一度六甲へ」というわけです。本部に連れて行かれた。ここで正當な手続きをふみ会員として認めてもらい現在に至っている。途中あれもやりたい、これもやりたいと迷った事もありましたが、やはり居心地のよい風韻会に籍を置かせてもらっています。手前勝手な事ばかりしていても追い出され

の活動に参加できたことほうれしい。(四年間も続くとは自分でも予想していなかったのだが)

四年間の活動を通じて得たことは多いが、その中でもうれしく思ったのは能を実際にこの目で見る事ができたことだ。能にはおよそ縁遠い環境で大きくなったものだから、風韻会に入っていないながら、一生能をみることもできずに終ってしまったにちがいない。もちろん私の能をみるというのは、単に能の装束の美しさにひかれることだが、毎年卒業していかれる先輩達が、能はできるだけみるようにと書いておられるが、それにはやはりそれだけの理由があるように思える。そこで私もというわけで一言「能はできるだけ見してほしい」と、言わせてもらうことにする。自分で謡曲仕舞をやるうとしている風韻会の人達にとって、能をみて得る所は数限りないと思うから。私の場合は装束の美しさにひかれたのが第一で、他にはあまり深いところは見ていなかったのだが、それでも何かのプラスにはなってきたことと思っている。

能を通じて感じたことにもうひとつある。美には絶対的なものがあるということである。何やらわからない事を言うようだが、これは私が何番かの能をみているうちに、雰囲気として感じたにすぎない程度だけれども、とにかく何か絶対的なものがあるように思える。それが何であるかはわからないのだが、これから先何十年か精進をつめばわかるかもしれないし、又わからずに終ってしまうことに望みをかけて、これからは機会があれば能をみつづけていきたいと思う。

風韻会のあしあと

昭和四十年度

三月

一日(月)——六日(土) 春季強化合宿

於吉野山東南院

参加者四十二名、宿所の設備、料理等はよく問題はなかったが、例年がない予想以上の寒さで、風邪をひく者続出。以後は時期場所とも充分に検討すべき。しかし技術向上、会員相互理解の両面に於ては大いに実があったと思われる。

練習曲目「鞍馬天狗」「安達原」「敦盛」「天鼓」「井筒」「熊野」「養老」「三井寺」「屋島」「小袖曾我」「草子洗小町」以上十一番。

二十日(土) 十三回生卒業歡送謡会

於六甲台学生会所

十三回生七名をお送りする。宇治師範はいにくの風邪の為御欠席ながら藤井会長、柚木、米花、福光の各顧問教授、原(7)前田(11)形部(11)有田(12)佐々木(12)の諸先輩、現役二十三名が出席、盛会であった。

四月

五日(月)——七日(水) 文化総部リーダー・トレーニング

於六甲ユースセンター

尾島洋三(J15)安藤幸雄(E16)の二名参加。とかく抽象論に陥り、マンネリ化のきらいあり。実際活動をふまえた上で文字通りのリーダー・トレーニングへの発展を期待したい。

十五日(木) 部室移転

長年住みなれた旧部室とも老朽の為に別れ、やや狭いが小さいいな部室に移転、板敷もあり今後仕舞の練習には好適。仕舞のレベルアップを期待しよう。

五月

三日(月) 三大学合同謡会

於湊川神社能舞台

素謡「養老」(シテ尾島洋三、ツレ三宅晃、ワキ松村有芳。連吟「土蜘蛛」(シテ小寺満雄。仕舞「笠ノ段」(砂見章子)「経正」(長谷川晴美)「杜若」(福本久美子)「竹生島」(楠田美樹)「屋島」(岸本公男)「高砂」(大林治郎。合同素謡「葵上」(シテ五十嵐勝三、ワキツレ山本康之。舞囃子「清経」(五十嵐勝三)。宇治師範仕舞「東北」、藤井会長独吟「鉢木」。宇治師範、藤井会長、都留好子先生ほか前田(11)山本(12)近藤(13)戸次(13)黒田(13)の五先輩出席。

九日(日) 宇治風韻会

於大槻能楽堂

有志十六名参加。連吟「放下僧」ほか。

十四日(金) 大学祭文化サークル合同発表会

於六甲台講堂

素謡「養老」(シテ安藤幸雄、ツレ植田勝弘、ワキ岩崎勝至)仕舞「草子洗小町」(川上勝美)「杜若」(岡田純子)「小督」(土田郁代)「桜川」(杉岡八千代)「綱ノ段」(古家清子)「紅葉狩」(梶谷清勝)「田村」(三宅晃)「羽衣」(松村有芳)「屋島」(尾島洋三)。

十六日(日) 大学祭園遊会模擬店「猩々」開店

於六甲台学舎前庭

心配していた天候も何とかもたえ、全員目の廻る忙しさで営業面、会員の親睦の両面に於て大なる成果があった。

二十三日(日) 四大学(神大、甲南大、神葉大、神商大) 交歓謡会

於六甲台学生会所

連吟「紅葉狩」(シテ浅瑛子、ワキ小原絢子)「橋弁慶」(シテ向浜幸雄、子方野田和則)「敦盛」(シテ上野圭輔、ワキ内海隆彦。他大学の練習状況等知ることができ参考にはなったが、今後主旨等を全員がはっきりと確認しておくことが必要である。

二十四日(月) 新入生歓迎、大学祭慰労コンパ

於五毛会館

六月

五日(土) 神戸女学院能楽研究会賛助出演

連吟「敦盛」(シテ岸本公男、ワキ大林治郎)。

六日(月)——八日(火) 二年生単独合宿

於六甲台学生会所

十二日(土) 関西学生能楽連盟春季大会

於山本能楽堂

連吟「敦盛」(シテ吉井皓一、ワキ内海隆彦。仕舞「経正」(戸田美代子)「草子洗小町」(浅瑛子)「熊野」(小原絢子)「吉野天人」(高尾浩子)「鶴亀」(梶谷清勝)「清経」(三宅晃)「芦刈」(松村有芳)「紅葉狩」(平岩正義)「高砂」(尾島洋三)仕舞は初舞台のものがほとんどで、今後舞台馴れが必要。

二十日(日) 観能会

於湊川神社能舞台

「杜若」(宇治師範) 外四番

参加者二十九名。

二十七日(日) 観能会(観世左近二十七回忌追善能)

「卒都婆小町」外、参加者五名。

七月

四日(日) シュニア祭サークル発表

於鶴甲学舎

素謡「橋弁慶」(シテ清見嘉朝、子方辻浩一、ワキ高橋雅晴)。仕舞「熊野」(福山和子)「紅葉狩」(吉留敦子)「鶴亀」(芥川美和子)「羽衣」(沼田真弓)

十二日(月)——十四日(水) 三年生単独合宿

八月

八日(日) 宇治風韻会主催による大槻能楽堂建設三十周年記念会

於大槻能楽堂

仕舞「天鼓」外八番。参加者九名。藤井会長ほか左鴻(10) 戸次(13) 先輩もこられた。

十五日(日) 関西凌霜謡曲大会

於宮山町松泉館

凌霜会の大先輩とも交流をはかろうとの意図で本年より参加することになった。休暇中の為参加者は少なかったが、有意義であった。連吟「敦盛」。仕舞「紅葉狩」(安藤幸雄) 「田村」(尾島洋三) 「羽衣」(岸本公男)。

参加者九名、山本(12) 先輩もこられた。

二十五日(水) 九月一日(水) 夏季強化合宿

於信州戸隠宝光社築山旅館

参加者四十二名。涼しく快適な気候の下、大いにハード・トレーニングの成果をあげた。

練習曲目「鞍馬天狗」「蟬丸」「放下僧」「賀茂」「船弁慶」

「天鼓」「千手」「安達原」「三井寺」「玉鬘」「土蜘蛛」「羽衣」「熊野」「田村」「竹生島」「紅葉狩」「富士太鼓」以上十七曲。

前田(11) 大良(12) 近藤(13) 黒田(13) の諸先輩もはるばる

九月

八日(水) 宇治風韻会主催による大槻能楽堂建設三十周年記念会
素謡「放下僧」「敦盛」、仕舞「羽衣」「松風」外参加者十八名。

十月

十日(日) 宇治風韻会秋季大会

於湊川神社能舞台

有志数名参加。

十五日(金) 十七日(日) 三・四年生コンクール用強化練習

於六甲台部室

練習曲目「小督」「蟬丸」「屋島」「三井寺」

三十日(土) 四年生就職、二年シニア進級お祝茶話会

於六甲パーラー喫茶室

出席者四十名。

十一月

十一日(木) 大阪市立大学祭賛助出演

於山本能楽堂

仕舞「敦盛」(松村有芳) 「網ノ段」(三宅晃) 「屋島」(尾島洋三) 「田村」(五十嵐勝三) 「天鼓」(小寺満雄) 「小袖曾我」(楠田美樹、大林治郎)。

二十九日(月) 神戸大学風韻会発表会

於六甲台講堂

二十日(土) に予定していたのが柚木学長急逝のため、延期。茶道部によるお茶席もやむをえず中止。先輩方も平日の故こられなかったが、学生、市民一般に能楽を普及するという当初の意図にそい、部員一同一致団結、気もちよく会を終えることができ、初めての試みとしてまずまず成功であったと思う。今後の充実発展を期待したい。

舞囃子「敦盛」(杉岡八千代) 「忠度」(岸本公男) 「船弁慶」(古家清子) 「小袖曾我」(楠田美樹・大林治郎) 番囃子「小督」(シテ松村有芳、ツレ尾島洋三、トモ梶谷清勝、ワキ三宅晃) ほかに素謡三番、仕舞三十二番、連吟九番。宇治師範はじめ藤井会長、荒川副会長も御出席。凌霜会の藤尾豊一氏もこられた。

十二月

十一日(土) 関西学生能楽連盟秋季大会

於大槻能楽堂

連吟「賀茂」(シテ上野圭輔、ツレ辻皓一、ワキ吉田孝平)。仕舞「羽衣」(小原絢子) 「玉鬘」(高尾浩子) 「松風」(戸田美代子) 「網ノ段」(浅瑛子) 「屋島」(岩崎勝至) 「小袖曾我」(平

岩正義・丹羽啓裕) 「篲ノ段」(尾島洋三) 「田村」(松村有芳) 「高砂」(三宅晃) コンクール曲「巴」(シテ山本康之) 左鴻(10) 前田(11) 佐々木(12) 久下(11) の先輩が応援にこられた。

十二日(日) 観能会

於大槻能楽堂

「小督」「松風」(宇治師範) 「唐船」ほか

感銘深し、参加者六名。

十九日(日) 昭和四十年語納会

於六甲台学生会所

終曲後、六甲台部室に於て本年度総括、反省会を行った。

なお本年度の練習曲は次の通り。

「養老」「敦盛」「女郎花」「玉鬘」「鉄輪」「巴」「海士」
「小督」以上八曲は二・三・四年生。
「鶴亀」「橋弁慶」「吉野天人」「土蜘蛛」「紅葉狩」「賀茂」
「富士太鼓」以上七曲は一年生。

コンクールを終えて

(B・14) 五十嵐勝三

本年のコンクール曲「巴」の決定は十一月月上旬に決まり、その後毎日九時二十分から部室で練習を行いました。が、秋季発表会の延期等で本格的練習は十一月三十日から開始。わずか十一日ほどの練習でしたが、師範には八日間ほど御指導を賜り、四年生八名は一致団結して練習。最後の十二月十一日には先生から「かなりの線まで」とのお言葉をいただいて大槻能楽堂へと……。我々の順番がきて「巴」をやることの短かったこと、ほんの一分ほどしか謡っていないような感じでした。終り楽屋で全員が「まあまあのできてあった」と話しあつておりました。そして左鴻・前田先輩諸氏に感想をお聞きした処「声もよくしまつていて揃つており、出あしも良く、年毎にレベルがあがつてきて上位はまちがいなし」とのことでした。しかし結果は、第八位で八名のもは表情にこそ出さなかつたが、くやしかつたであろう。しかしせめても先輩諸氏からの言葉がうれしかつた。

しかしコンクールがあることによつて、我々が熱心に毎朝九時二十分から練習し八名が一致団結できたこと。又宇治先生の謡というものでも少しも理解しえたことはプラスであつた。あくまでこのために利用すべきであつて順位にとらわれないように後輩諸君に御注意申し上げます。

スポーツ等の上にはつきり勝負がつくものならいざしらず、謡

に順位をつけることの不可能さを認識すべきではなからうか。

三大学謡会のお知らせ

三大学謡会は五月三日、大阪市大当番校の下に行われます。舞台等は未定ですが京阪神に在任の先輩各位の御出席をお願い致します。

詳細は追つて御連絡致します。

神戸大学風韻会

先輩各位

御寄付のお願い

ここに「風韻」第六号をお送り致します。

さて、現在の風韻会の財政状態は非常に苦しく、なんとかその日ぐらしたといった有様です。今年からは秋季大会をより充実させ部員の向上を図るために、番囃子・舞囃子を多く致しました。その効果は多く、来年度もぜひこれを続けて行きたいと存じます。つきましては誠に申訳ございませんが、雑誌発行関係費及び風韻会活動助成金として、一口千円の御寄付を御願ひいたく存じます。

同封の振替用紙、あるいは現金書留で御送付下さるようお願い申し上げます。

先輩各位

神戸大学風韻会

編集後記

○本号は、柚木警前学長の追悼号として会員の皆様方にお送り致します。

○本号より、関西凌霜謡曲同好会（鞍馬会）の大先輩にも御登場していただくため、今回は、大先輩のアンケートを掲載することに致しました。次号からも、大先輩とこの雑誌を通じて交流を図り、御指導を御願ひ致したく思いますので、よろしくお願ひ致します。

○風韻会も五十名を越える大家族となり、先輩の数も三百名を越えるばかりになりました。我々といたしましては今後先輩との関係をより密なものにし充実するための一

助としての力が「風韻」を通じて与えられる事を願うこと切であります。

○最後に「風韻」第六号発行に際して種々御支援を賜りました皆様に心から御礼申し上げます。
(五十嵐)

編集委員

五十嵐勝三
岸本公男
大林治郎
楠田美樹
小寺満雄



昭和四十一年二月二十日印刷
昭和四十一年三月十日発行

神戸市灘区六甲台町

発行所 神戸大学風韻会

印刷所 水三島紙工株式会社

電話大阪四一六七四八番